



“脱ステロイド”放送に関して

大塚 篤司

近畿大学医学部皮膚科学教室主任教授

先日、某テレビ番組で“脱ステロイド”が紹介された。患者は顔面の湿疹が治らず、手湿疹に使っていたステロイド外用薬を自己判断で顔に使用したところ皮疹が悪化し、酒皰様皮膚炎をおこしたようだ。相談した皮膚科医が過激な脱ステロイドを推奨し、その後リバウンドで苦しむことになる。その経過の説明に間違いが多く、非常に頭を悩ます内容であった。

まず、ステロイドを使わないで様子を見ることを「脱ステロイド療法」と紹介した。これは治療でもなんでもなく、ただの病気の放置である。また、顔にステロイドを塗り続けた結果、体内のステロイドホルモンの産生が抑制されたと番組内で紹介された。これも明らかな間違いで、顔だけにステロイド外用薬を使用することではどうもおこりうることではない。ストロングステロイドを1日10g以上使用し、副腎機能抑制がおきる可能性が知られている。また、顔面におきた強いリバウンドを経時的に紹介し、ステロイド外用薬が怖いという印象を視聴者に与えながら、リバウンドでおきる白内障や網膜剥離、感染症などの危険性には一切触れない構成となっていた。ステロイド外用薬を使用中の患者に不安を与え、医療現場に混乱を与えうる番組であった。

私はすぐに番組公式Twitterにコメントを入れ、Webメディアの1つで医療系に強い『BuzzFeed Medical』に反論記事を寄稿した。記事は反響が大き

く、Yahoo!ニュースでも取りあげられたことで番組の責任者とつながることができた。話を聞いてみれば、医療に関する無知から生まれた企画であり、悪意があったわけではなく(だからといって許されるものではないが)、番組を監修した医師が脱ステロイドを推奨する偏った意見の持ち主だったこともあり、内容がそれに引っ張られてしまったようだった。

その後の訂正や謝罪までは、自治医科大学の大槻マミ太郎先生をはじめ皮膚科学会理事の先生方が動いてくださり、翌週には放送内で謝罪をするスピード解決につながった。時間を割いて番組内で謝罪したことで、医療現場への混乱は最小限で抑えられたことを願っている。

テレビで取り扱う医療情報は根拠に乏しく、健康被害がおこりうる内容も多い。われわれ専門医はマスコミに対し適度な緊張感をもって付き合い、間違いをおこさないよう将来につながるシステムの構築が必要だろう。